

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）  
 大学院生研究  
 2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	英米文学専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	経営学部教授		野田 研一 印		
自然・人文の別	人文		個人・共同の別	個人	
研究課題名	環境文学とエコクリティシズム研究 - Henry Thoreau の〈市民的不服従〉との関連から				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科英米文学専攻 博士後期課程3年		山本 洋平 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2006		年度		
研究経費	200		千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究における第一の目的は、90年代以降、急速に進んだ「エコクリティシズム（環境文学研究）」の研究をすすめ、文学研究への理論的基礎を固めることである。とりわけ、2000-05年の研究を総括をする。第二に Henry Thoreau の作品・思想に焦点をあて、理論を実践へと移すことを試みて、この批評の方法論がどれだけの可能性をもつのかを見きわめる。第三に、1960年代は、Edward Abbey をはじめとして環境文学が賑わい始める時期にあたり、また、Henry Thoreau の意義が見直された時期にあたるが、この自由民権運動やヒッピー文化といった時代背景と、環境文学というジャンルがいかなる接点をもちうるのか、その関係性を明らかにする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ エコクリティシズム ] [ ヘンリー・ソロー ] [ ロマンティシズム ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. ヘンリー・ソロー研究**

ソローの第一作、*A Week on the Concord and Merrimack Rivers* における散文と韻文が混淆した作品形態を研究することによって、文学ジャンルの融合を前景化した作品と位置づけ、アメリカン・ロマンティシズムの詩学の一面を手繰り寄せた。アメリカン・ロマンティシズムの詩学が英国詩人の強い影響下にあるとする通説と、アメリカン・ルネッサンスがエマソンの詩学を基盤に花開いたという通説とが、ちょうど重なり合う交点にいたのが、もっとも評価の低い詩人ソローであったのは、文学史的逆説と言うべきである。以上の内容は、『ヘンリー・ソロー研究論集』(第 33 号、2007 年)で公表した。

**2. 環境批評の応用可能性について**

環境批評はこれまで、ノン・フィクションや詩を得意分野としてきたが、他の文学ジャンル、例えば小説研究への有効性を問うための、ひとつのケース・スタディとして、20 世紀アメリカ文学の代表的小説家として知られるアーネスト・ヘミングウェイ研究の先行研究を整理した。ヘミングウェイをめぐる環境批評の萌芽は、早くも 1987 年の Glen Love の "An Ecological Reconsideration" に始まっている。さらに、Love の指摘を受けて、*The Hemingway Review* 誌上にも飛び火し、1990 年に Susan Schmidt による "Big Two-Hearted River" を "ecological" な視点からよむ小論、さらには 2000 年の Susan Beegel 論文にいたるまで、散発的ではあるが、静かな盛り上がりを見せてきた。

環境批評的方法論によるヘミングウェイ理解の見直しの一大集成ともいえるのが、Robert Fleming 編集の *Hemingway and the Natural World* である。環境文学の旗手のひとり Terry Tempest Williams が序文を寄せている。これらの先行研究を参照すると、環境批評的な方法論とは、以下三方向にまとめられる。(1) テクストから自然の表象を抽出する方法、(2) 環境主義的である点を評価する方法、(3) 場所論、ジェンダー、ポスト・コロニアリズムなど、現代批評における方法論を環境とのつながりで認識論的に取り込む方法。(3) がもっとも有効ではないかと考えている。

ヘミングウェイの「冰山理論」と呼ばれるシンプルな文体から影響を受けたと述べるのは、T.T Williams だけではない。いわゆる「ネイチャー・ライター」の代表格の一人とされる Annie Dillard が、ヘミングウェイの文体についてのエッセイを書いている事実もある。これらの点から、環境批評とヘミングウェイとは歴史は浅いながらも、実に深い関係が結ばれてきたと言える。以上の内容は、2006 年日本ヘミングウェイ協会の口頭発表に基づいている。その際いただいた多くの指摘を活かし、2007 年度以降公表する予定である。

## 研究成果の概要 つづき

## 3. 環境批評とアジア

アメリカ文学を専門とする学生にとって、「アジア」を研究対象とするのは、言語的障壁が多く、多難ではあるが、北米中心の「エコクリティシズム」をアジアからの視点で相対化するのは不可欠である。こうした考えに基づき、研究の糸口としてまず、英訳された韓国詩（"Cracking the Shell"）を読み進めた。その一人、金芝河（キム・ジハ、Kim Chiha）の政治思想と環境思想の関係性をさぐるべく、伝記的事実のリサーチと詩作品の読解を行った。金芝河という詩人は 1970 年代には「抵抗詩人」「政治的詩人」として知られ、90 年代からは、「環境詩人」として知られるようになる。

環境文学研究者にとって、金芝河の思想の展開は、一方では、国家権力に抵抗し、投獄されてもなお不退転の決意を示しながら、他方で、抒情的な詩や散文を書くヘンリー・D・ソローという文学者像と見事に重なり合う。さらに言えば、金芝河が「抵抗」から「環境」へと思想の中心を移行された事実は、歴史的必然といえるかもしれない。例えば 1960 年代には、ソローの再評価や、公民権運動、ヒッピー文化などの時代背景があったが、90 年代から現在にかけて、環境問題をめぐる話題がメディアに頻発するという時代の流れと呼応するよう見える。

以上の議論は、2006 年文学環境学会（ASLE-Japan）の全国大会にて口頭発表した。多くのご教示をいただき、引き続き、アジア的環境批評の模索として、韓国詩人を研究する。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

1. 山本洋平「<必然>が産みだす文体—ソロー、ディラード、動物遭遇譚」『文学と環境』(文学・環境学会/ASLE-Japan) 第9号、2006年、13-20.
2. 山本洋平「*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*における散文的詩と詩的散文」『ヘンリー・ソロー研究論集』(日本ソロー学会) 第33号、2007年、11-20.

④ 学会発表

1. 文学・環境学会/ASLE-Japan・2006年9月9日・東北大学「韓国環境文学をめぐって—金芝河を読む」
2. 日本ソロー学会・2006年10月13日・青山学院大学「The Muse Speaks in Prose—*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*における散文的詩と詩的散文」
3. 日本ヘミングウェイ協会・2006年12月17日・関東学院大学「"Cat in the Rain"—環境批評による再考」